

Frederick B. Agard 著

「ルーマニア語における名詞形態論」

("Language" Vol. 29, 1953, pp. 134 - 142)

— その紹介と注釈 —

鈴木ひろみ

〔紹介者はしがき〕

このレポートの目的は、F. B. Agard, Noun Morphology in Romanian を紹介し、さらに注釈をつけて、ルーマニア語の一面を検討することである。ルーマニア語は、日本ではまだほとんど知られていないため、この論文を理解するための必要最少限の文法は紹介しておく必要があると考えて、注釈は、訳語上の問題だけに止まらず、文法にまで立入って解説を試みたところもある。なお、訳はなるべく原文に忠実につとめたが、わかりにくいところは、日本語としてわかりやすくするためにいくぶん原文から離れたところもある。用語の訳については、L. Bloomfield の Language の日本語訳や大塚高信編「新英文法辞典」(三省堂)を参考にした。

〔本 論 〕

0. この論文は、語尾変化のしかたによって名詞と定義づけられる、ルーマニア語の、語の部類を、形態音韻論的、形態論的に研究したものである。

音素の形で個々の例を並列することから出発し、結論は、形態論上の型によって、また形態素の定式によって、名詞を分類することである。例は、本国人 原注¹ の助けをかりて解釈され、また、本国人の発話によって補われるルーマニア語の原文 原注² から引用される。

基礎になる音素の分析は、その著者のものである。音素の資料は、ここでは、例示するためにのみ与えられるのであって、それらはルーマニア語の音素論を完全に提示することにはならない。標準的なルーマニア語 原注³ の音素は、次のごとくである。

○成 節 音：

{ 2つの前母音(front vowel) | i, e |
{ 3つの中央母音(central vowel) | i, ə, a |
{ 2つの後母音(back vowel) | u, o |

これらのうち、| i, i, u | は高(high)、| e, ə, o | は中(mid)、| a | は低(low)である。

○非 成 節 音：

{ 6つの唇音(labial consonant) | p, b, f, v, m, w |
{ 8つの歯茎音(alveolar consonant) | t, d, c, s, z, n, l, r |
{ 5つの硬口蓋音(palatal consonant) | č, ĝ, š, ž, j |
{ 3つの軟口蓋音(velar consonant) | k, g, h |

○アクセント：

{ 1つの強勢 | ' |
3つの高さ | 1, 2, 3 | 原注4

○連接 (juncture)：

{ 語内の連接 | + |
語尾の連接 | | | . |

当言語は、音韻的な語を有しており、それらは単一のアクセントをもった自由形式 (free forms) として定義づけられる。例— |kibríturil| (=the matches), |deobičéj| (=usually), |umpriéten| (=a friend). それは、形態音韻的な語も有している。それらは、意味によるのではなくて、変化表に示される語尾変化の型によって、4つの型に分けることができる。すなわち、名詞・代名詞・形容詞・動詞 原注5である。我々は、ここでは、名詞だけをとりあげる。

名詞は、(定義によれば) 次のような形態(モーフ)を結びつけたかたちで、変化表に現れる：語根 (base) ± 複数語尾 (plural inflexion) ± (定冠詞屈折 訳者注1 (definite inflexion) ± 斜格屈折 (oblique inflexion))、原注6, 訳者注2
すべての名詞は、形態的であると同時に、音韻的な語 訳者注3 である。しかし、音韻的な語の中には、2つまたはそれ以上の形態的な語から成り、その最後のものだけが名詞であるようなものもある。たとえば、上に引用した |deobičéj|, |umpriéten| 原注7 などである。音素の起りかたに関する制限は、音韻的な語では明確に示すことができる。それは、我々の分析の形態音韻論の部分に関係する。次のような音素の連続は、音韻的な語では起こらない。

(1) どのような位置においても：

|θV|, 訳者注4 |Vθ| (|uθ| を除く), |Vea|, |Vi|, |Ve| (|ie, ue| を除く), |éa óa|, |we|, 重母音 (geminate vowel), 硬口蓋音 |ç| の後の |ea| または |j|。

(2) 語尾において：

|é ó|, 弱母音 |i, aj|, |Vu| (|iu| を除く), 終りが |l, r| であるような子音群。

(3) 語頭において： |oa|

原注1 W.M.Austin 著 “Spoken Rumanian” (発行されていない)：この論文は、著者と the American Council of Learned Societies との許可により、the School of Language Training, Foreign Service Institute, Department of State のために転載されたもの；Grigore Nandriş, 著 “Colloquial Rumanian” (London, 1945)；Mircea Eliade 著 “Iphigemia” (Valle Hermoso, Argentina, 1951)；Marcel Schönkrön 著 “Rumanian-English and English-Rumanian Dictionary” (New York, 1952)。

原注2 著者は前もって、同じ材料をもとにして、ルーマニア語を十分に記述した。

原注3 標準的なルーマニア語とは、ここでは、著者が分析した2人のルーマニア人の発

話に使われたような、Bucharest地方の方言をさす。2人のルーマニア人というのは、Iris Barbura (B) (Transylvania, Aradの生まれで、成年時代をほとんどBucharestで過ごした)と、Iulian Prundeanu (P) (Bucharestの生まれ)である。年齢や出身地の異なる他の多くのルーマニア人の発話を観察してみると、BとPの方言から、あまり重大な構造的逸脱はないことがわかる。

原注4 この論文における形態はすべて、単に引証するためのものであって、伝達するために発話されたものではないので、語の高さや接続の音素は、それらの記述の中には含まれない。

引証の図式は一様に、 $|(1)\dots 2 \dots 1|$ であり、 $|tát\theta|$ は $|^2tát\theta^1|$ (=father), $|kibrít|$ は $|^1ki^2brít^1|$ (=match) と表わすなど……。

原注5 屈折しない語の部類が残されている。

原注6 カッコ()は、定冠詞屈折は格屈折なしでありうるが、逆はありえないことを意味する。

原注7 これらの音韻的な語は、完全には屈折しないので、その語形変化表によっては名詞と定義することはできない。 $|deobičéj|$ は、 $|deobičéjuri|$ (= of customs) という屈折のみを持ち、 $|umpriéten|$ はまったく屈折しない。他方、 $|običéj|$ (=custom)と、 $|priéten|$ (=friend)は完全に屈折する。

訳者注1 ルーマニア語では、定冠詞は語尾の変化で表わされ、性・数によって異なる。図示してみれば、次のごとくである。

	単 数	複 数
男 性	-l, -ul, -le	-i
中 性	-l, -ul, -le	-le
女 性	-a	-le

例：男性 { un băiat [umbəiát] = a boy
 băiatul = the boy
 băieți = boys
 băieții = the boys
 中性 { un caiet [uŋkaiét] = a notebook
 un caietul = the notebook
 caiete = notebooks
 caiețele = the notebooks
 女性 { o carte [okárte] = a book
 cartea = the book
 cărți = books
 cărțile = the books

訳者注2 原注6によってもわかるように、斜格屈折は定冠詞語尾の屈折として現われる。それは、次のごとくである：

	男 性		中 性		女 性	
	単 数	複 数	単 数	複 数	単 数	複 数
N	-l	-ii	-l	-le	-a	-le
G	-lui	-lor	-lui	-lor	-ei	-lor
D	-lui	-lor	-lui	-lor	-ei	-lor
A	-l	-ii	-l	-le	-a	-le

nominative と vocative を除いた他の格を oblique と呼ぶが、訳者はそれを、斜格屈折と訳した。

訳者注 3 |deobičej| はルーマニア語のつづりでは de obicei であり、de は前置詞、obicei は名詞である。また、|umprieten| はルーマニア語でつづれば un prieten であり、un は不定冠詞、prieten は名詞である。著者はこれらを一続きの音韻的な語（音韻論上の語）、とみている。

訳者注 4 V は vowel (母音)の略。

我々は名詞に現われる音素の分類をそれらが生起する順序で、まず Base 訳者注 5 から始めて、分類するであろう。

1 base は、それ自体は自由形式である。もしそれらをその語尾の音素によって整理すれば、我々は次のようなグループ 原注 8 に到達する。

(1) |ə| :

cárə (=land)	púškə (=gun)
čápə (=onion)	roátə (=wheel)
fátə (=girl)	seárə (=evening)
fíjkə (=daughter) 原注 9	sfíntə (=saint)
flákərə (=flame)	slúgə (=servant)
gískə (=goose)	sórə (=sister)
járə (=winter)	strádə (=street)
kásə (=house)	škoála (=school)
kəməšə (=shirt)	tátə (=father)
lúnə (=month)	treábə (=task)
márfə (=wares)	vákə (=cow)
másə (=table)	várə (=summer)
mínə (=hand)	viácə (=life)
nórə (=daughter-in-law)	wárə (=time)
pisíkə (=cat)	zəpádə (=snow)
pjátrə (=stone)	

(2) |e| :

báje (=bath)	múnte (=mountain)
bére (=beer)	núme (=name)
feméje (=woman)	ploáje (=rain)

fráte	(= brother)	soáre	(= sun)
hirtíe	(= paper)	vréme	(= time)
kárte	(= book)	wáje	(= sheep)
krúce	(= cross)	wáspe	(= guest)
míngē	(= ball)	žumðtáte	(= half)

(3) | u | :

lúkru	(= thing)	sufráǵiu	(=suffrage)
sédiu	(= seat)	teátru	(=theater)

(4) 語尾に許される子音または子音群 (|g| を除く) :

avíon	(= airplane)	kuvínt	(=word)
bðc	(= stick)	mðr	(= apple)
bðjæt	(= boy)	muzéw	(= museum)
bðtrán	(= old person)	númðr	(= number)
bíç	(= whip)	ókj	(= eye)
brád	(= pine)	óm	(= man)
buník	(= grandfather)	ów	(= egg)
deál	(= hill)	pás	(= step)
dentíst	(= dentist)	plðmíni	(= lung)
engléz	(= Englishman)	pribeág	(=exile)
ewropeán	(= European)	rðzbój	(= war)
fíw	(=son)	ríw	(= river)
kadów	(= gift)	sát	(= village)
kál	(= horse)	servíç	(= service)
káp	(= head)	strígðt	(=shout)
kibrítt	(= match)	studént	(=student)
kopíl	(= child)	tínðr	(=young person)
kucít	(= knife)	viteáz	(=hero)

(5) 強母音 | í | あるいは | á |

skí	(= ski)	pará	(= money)
zí	(= day)	pižamá	(= pajama)
kafeá	(= coffee)	steá	(= star)

原注 8 この論文で後に使われる例はすべてここに含まれている。各グループ内でアルファベット順に並べられている。Base の後の英訳は、後の引用の中ではくり返さない。

原注 9 報告者 B は、| pisíkð | (=cat) と発音すると同じように、(P もこう発音する) | fíkkð | と発音する。しかし、彼女は、その発話の他の部分では、| íj | という発音もしている。

訳者注 5 三省堂「新英文法辞典」では、Base の項に次のような説明がある。

「アメリカ構造言語学では、……形態素のうち、分節形態素のほうを二つに分けるとき得られるのが、基体 (Base) と接辞 (Affix) の二つである。……しかし、このような基体 (Base) のことを語根 (Root) の名で呼ぶ学者もいる。そして、Root をこの意味

で用いるとき、base は、特定形態素を形成する二つ以上の異形態 (Allomorph) のうち基本形 (base form) をさすのに用いる。……」

B. Agard 氏 の場合は、後の場合にあてはまる。訳者は、まぎらわしいので、base と原語で書くことにする。

語尾が | θ | である base の数は非常に多い。我々はそれらを θ -base と呼び、そしてそれを形態音韻論上 base 母音 $-\theta-$ をつけて書くことにする。例、kas θ -, lun θ -, pisík θ -。原注 10

|e| で終る base の数もまた非常に多い。我々はそれを e-base と呼び、base 母音 $-e-$ をつけて書く。例 — bere-, hirtie-, kruče-。

|u| で終る base の数は少ない。|u| は、語尾には絶対に来ることのない子音群によって先行されるか、あるいは、アクセントのない母音 |i| (それもまた絶対に語尾にくることはない) によって先行される。我々はこれらの base を、数多くの子音語尾と共に、“the ……” を意味する定冠詞の形を含めて、一連のものとして考察する。例 — |lúkru lúkrul|, |sédiu sédiul|, |muzéw muzéwl|, |kadoń kadóul|, |án ánul|, |sát sátul|, |bíč bíčul|。

我々は、定冠詞の音素を、|ul| よりもむしろ |l| であることを前もって確認しておく。もし我々が、定冠詞 |l| の前に常に現われる |u| を、base の一部として考えるならば、これらの形も一つの base 母音をもつと考えることができる。さらに、それが |w| という語尾に変化しても、それは前述の母音 |u| に対する制限によるものである。それが消失する変化は、音韻論的な条件によるものではない；(cf. |rádu| ……人の名前、|lupésku| … Lupescu) がしかし、名詞 base の原型の範囲で、その子音または子音群が語尾にくることができ、したがって |u| の消失であると予言できるところではどこでも、それは規則的である。2つの変化する要素を含んだ形態音素は、ここでは、|u~#| 訳者注 6 であるが、特別な注意は必要としない。これを我々は形態音韻論上 base 母音 $-u-$ をつけて書く。例 — sédiu-, ánu-, sátu-。我々はさらに、前に述べた制限のために、 $-u-$ は lúkru-, muzéu-, kadóu- では消失しえないことを注意しておく。原注 11

我々は今や、語尾の母音 θ , e, u を備えた 3 つの base グループをもつことになる。|í| と |á| で終る残りの base は少ない。それらは当面分類せずに残しておくほうがよいであろう。その理由を後に示す。

原注 10 これらの base においては、アクセントは語尾には来ない。それゆえに、アクセントは、1つ以上の母音または母音群 |ea, oa| などを含むもののみ書く必要がある。

原注 11 fiu- や riu- のような型で、 $-u-$ が語尾のゼロと交代することが可能であろう。しかし、何も base につかない形の |skí| を持つ skiu- の場合だけを除いて、強勢のある母音の後の型は、一貫して |u~w| である。

訳者注 6 消失を意味する。

2. 複数形態 (Plural Morphs) 訳者注7

多くの θ -base, u-base, そして非常にわずかの e-base は |e| または |je| という形の複数形態をつけ加える。例— |kás θ káse|, |núme núme|, |sát sáte|, |muzéw muzéje|. 母音の直後にくる |je| は音韻上の制限のためであることに気づけば, |e| の方を基本的な音とすることができ, またその複数形態を形態音韻論上 -e- と書くことができる: kas θ . e-, nume. e-, satu. e-, muzéu e-. base 母音の消失は, u-base 以外の base では自動的であり, u-base では規則的である。原注12

3つのグループの他の多くの base は, 複数形態 |i~j|, |ji~j| または |i~#| をつけ加える。そのような変化の見られるところに, 我々は, base, base + 複数, base + 複数 + 定冠詞 を含む語形変化表を作ってみなければならぬ。例— |lún θ lúnj lúnile|, |bére bérj bérile|, |hírtíe hírtíj hírtíjile|, |sédiu sédij sédijile|; |krúče krúč krúčile|, |míngě míngě míngěile|, |feméje feméj feméjile|. 我々は, |i| が第3番目の形に, すなわち定冠詞形態と確認される |le| の前に常に現われることがわかる。この接尾辞は, e- 複数の母音と同じである; それは, 接尾辞 -e- が |je| として現れるのと同じ音韻上の理由で, また同じ条件で, |ji| として現われる。|i| を基本的なものとするれば, 我々は第1のグループにおける語尾の |j| への変化は, 語尾での弱母音 |i| と |çj| 訳者注8 それぞれに対する制限によるものであるとみなしてよい。形態音韻論上, この複数形態を -i- と書く: lun θ . i-, bere. i-, hírtíe. i-, sédiu. i-; kruče. i-, míngě. i-, feméje. i-. -i- の前の base 母音の消失もまた, |vi| に対する制限のために自動的である。原注13 |servíč servíčij servíčijile| という語形変化表は, servíču. i- よりも, servíčiu. i- と解釈されるならば, その図式に合う; この種の i- 複数は bíču. e- のような数少ない e- 複数よりも, sufrágiu. i- の型と関連する。

どの base が e- 複数をとりか, またどの base が i- 複数をとりかを一律に予言することはできない。すなわち, θ -base と u-base においては, どちらもその主たる複数語尾とはならない。しかし, e-base においては, i- 複数が非常に多いので, 我々は, -i- を標準的な複数形, -e- を特殊な複数形として分類する。標準的な複数形をとる base は, 特に印されない。例— lun θ -, bere-, anu-. 特殊な複数形をとる base は \vee という印で示される。例— kas θ^{\vee} -, nume \vee -, satu \vee -。

原注12 たった1つの例外 |ów ów θ | を除く。そこでは, 消失の代りに, base 母音は |w| へ変化し, そこで |we| に対する制限のために, 複数 -e- が | θ | という特殊な形で現われている。

原注13 他方, 形態音素 -j- の前では, 自動的ではない。というのは, |Vj| はありうるからである。

訳者注7 ルーマニア語の名詞は, 性によって異なった複数語尾をもつ。そして, 複数形になると, 複数語尾がつけ加えられるだけでなく, base 内の音に変化がおこる。その変化については, 第3節と第5節で詳しく分析している。ルーマニア語名詞の複数語尾は次のごとくである。

$\left\{ \begin{array}{l} \text{男 性} \\ \text{中 性} \\ \text{女 性} \end{array} \right.$	-i	
	-e	あるいは -i
	-e	あるいは -i

訳者注 8 第0節の音素の連結に関する制限のところに説明してあるように、 ζ は、硬口蓋音 $|\check{c}, \check{g}, \check{s}, \check{z}, j|$ を示す。

3 base 子音の変化

base 子音 というのは、base 母音 に直接に先行する子音または子音群である。前記 3 グループの中の、ある base においては、base 子音 は種々の変化を行う。いずれも条件的ではないが、その原型の範囲内では、ほとんど規則的である。その変化は、次に続く母音の形態音素、すなわち base 母音またはそれに代る複数語尾によって、分類することができる。

θ -base と u-base には、 $|k\sim\check{c}|$ ($|sk\sim\check{s}t, \check{s}k\sim\check{s}t|$ を除く) と、 $|g\sim\check{g}|$ がある。非軟口蓋音化するこの変化は、前母音の前で起こる。例— $|vák\theta vá\check{c}|$, $|fíj\check{k}\theta fíj\check{c}e|$, $|buník buní\check{c}|$, $|gí\check{s}k\theta gí\check{s}te|$, $|pú\check{s}k\theta pú\check{s}tj|$, $|slú\check{g}\theta slú\check{g}|$. base 子音を基本的な形とみて、我々はこれらの変化に対して、形態音素 $-k-$ ($-sk-$, $-\check{s}k-$ を含む) と $-g-$ を置き、単に $vak\theta-$, $fij\check{k}\theta-$, $buníku-$, $gisk\theta-$, $pu\check{s}k\theta-$, $slug\theta-$ と書く。予想される $-i-$ の消失変化は ζ の後で起こる； e-base では、base 母音 も複数形態も前母音であるので、この種の変化は起こりえない。

前記 3 グループの中の標準複数形をもつ base では、 $|t\sim c|$ ($|st\sim\check{s}t$ を除く), $|d\sim z|$, $|s\sim\check{s}|$, $|z\sim\check{z}|$ の変化がある。その第 2 の変化は $-i-$ の前で起こる。例— $|tát\theta tá\check{c}j|$, $|fráte frácj|$, $|studént studéncj|$, $|brád brázj|$, $|pás pá\check{s}|$, $|dentíst dentí\check{s}tj|$, $|engléz englě\check{z}|$. ふたたび、base における子音を基本的な形として、我々は形態音素 $-t-$ ($-st-$ を含む), $-d-$, $-s-$, $-z-$ を置き、単に、 $tat\theta-$, $frate-$, $studéntu-$, $bradu-$, $pasu-$, $dentíst-$, $englézu-$ と書く。 $|s\sim\check{s}|$ の変化は、 $-s-$ が子音群の最初の子音であっても起こる；上に述べたように $-i-$ の消失と予想できる変化は ζ の後で起こる。

標準的な複数形をもつ e-base と u-base では、 $|l\sim\#|$ $|n\sim\#|$ の変化がある。この消失は、 $-i-$ の前で起こる。例— $|kál káj|$, $|kopíl kopíj|$, $|pl\theta mán pl\theta mánj|$. これらの変化は、規則的ではない：cf. $|\check{g}enerál \check{g}enerálj|$, $|\án ánj|$. その結論としていえることは、この変化においては、形態音素はただ単なる $-l-$ や $-n-$ ではない；我々は、それらを $-L-$, $-N-$ で表わし、 $kaLu-$, $kopíLu-$, $pl\theta mánNu-$ と書く。

形態音素 $-L-$ の存在を確認して、今度は、強母音で終る base にも立ちもどるとともに、それらをその特殊な複数形と比較してみよう。例— $|zí zíle|$, $|pará parále|$, $|pižamá pižámále|$. その複数屈折は、base 子音としての $|l|$ を伴った base の変化であり、それは今では、形態音素 $-L-$ として定義づけることができる；また それは、 $-\theta-$ の前でも消失する。それゆえ、これらの base は、 θ -base に入る。我々はそれらを $ziL\theta-$, $paráL\theta-$, $pižamáL\theta-$ と書く。名詞は今やすべて

3つの base グループに分類された。

4 付加要素を伴う語根 (Augmented Bases)

θ-base のうちわずかのものと、e-base では1つだけ、そして u-base の多くは、複数形になるとき、アクセントのない |ur| がつけ加えられる。例 — |vréme vrémurj|, |lúkrú lúkrurj|, |kadów kadóurj|, |kibrít kibríturj|。この付加要素は規則的ではない。我々はそれを形態音韻論上 [ur] として base の中に入れて書く。例 — vrem[ur]e-, lukr[ur]u-, kibrít[ur]u-。そのように付加要素をつけられる base はすべて、標準的な複数形をもつ。

6つの base は、不規則に付加要素をつけられる； s[ur]orθ-|sórθ surórj|, n[ur]orθ-|nórθ nurórj|, oasp[et]e-|wáspe wáspecj|, 原注 14 kap[et]u^v-|káp kápete|, oam[en]u-|óm owámenj|, mi[j]nθ-|mínθ m'ijnj|。

原注 14 これは、base|wáspete| をもった oáspete- の自由な変化 (free alternant) であるにすぎない。形態音素群 -oa- の働きは以下で取り扱われる。

5 Base における強母音の変化

3つのグループのすべてにわたって、多くの base では、次に続く base 母音、あるいはそれに代る複数語尾に関連して、強母音に変化する。これらの変化はいずれも何らかの条件によるものではないが、ほとんどは規則的である。

標準的な複数形をもつ多くの θ-base と e-base では、高母音の前では |á| は |ó| と高母音化される。例 — |cárθ córj|, |kəməšθ kəməš|, |márfθ mórfrurj|, |kárte kórcj|, |žumθtáte žumθtócj|。他方、|vákθ vác|, |tátθ tácj|, |fráte frácj| の例は、これらが 形態音素 -a- の示す変化ではないということを示している。base の強母音として |ó| をもつ θ-base や e-base は無いということから、その変化は、複数形の高母音の前では |ó| として、また base の中母音の前では |á| として規則的に現われる形態音素 -θ- の変化とみてよい。問題の base は、したがって、形態音韻論的には cθrθ-, kəməšθ-, mθrf[ur]θ-, kθrte-, žumθtócete- となる。

u-base の |ó| は (そのグループでのみそれは base において可能であるが)、前母音の前で、|é| と前母音化される。例 — |mór mérj|, |bóc béce|。この変化は、|á~ó| の変化を補足するものであり、同じ形態音素 -θ- の変化とみてよい。そして我々は、それらを mθru-, bθcu^v- と書く。原注 15

θ-base と付加要素のつかない標準的な複数形の u-base では、|eá| は前母音か Çの前では |é| に変化する。例 — |seárθ sérj|, |treábθ tréburj|, |steá stéle|, |viteáz vitéž|, |pribeág pribéğ|。他方、特殊な複数形の u-base|teátru teátre| と、付加要素のつく u-base|deá deálurj| は、この変化を示さない。その変化は、base の型に関連して規則的であるので、それは 形態音素群 -ea- の変化とみてよい。我々はそれを、teátru^v-、

deal[ur]u- と同様¹⁴, searθ-, treab[ur]θ-, stealθ^v, viteázu-, pribeágu- と書く。

同じような変化, |á~é| は, 同様の条件のもとで, また すぐ前の音素に関連して, |eá~é| の変化を部分的に補足するものである。つまり, |á~é| は Ç または |i| の後で起こるが, |eá~é| はそこでは起こらない。例— |čápθ čépe|, |járnθ jérnj|, |pjátrθ pjétre|, |bθját bθjécj|, |viácθ viécj|。|Çea| はないということから, |á| は語根の |eá| の条件づきの変化とみなしてよい。そして Ç の後の |á~é| の変化は, 同じ形態音素群 -ea- の変化とみてよい。我々は, čeapθ^v-, jearnθ-, pjeatrθ^v-, bejeátu-, vieácθ- と書く。

しかしながら, |eá~é| も |á~é| もどちらも唇音の後に起こり, したがって, それらはそこでは異種の変化のようである。例— |zθpádθ zθpézj|, |fátθ féte|, |várθ vérj|, |másθ mése| に対して, |ewropeán ewropénj|, |kafeá kaféle|。これを, ewropeánu-, kafeálθ^v- と書くと, 唇音の後の |á~é| の変化とは, 形態音韻論的には同一ではない。強母音も, 先行する子音も異なる。そこで, 我々は, |á~é| に先行する子音を, 形態音韻論からみて, 口蓋化された唇音であることを認めた上で (その後では -ea- は |á~é| として現われる) zθpeádθ-, featθ^v-, véarθ-, méasθ^v- と書く。

標準的な複数形をもつ θ-base と e-base では, |oá| は -i- の前で |ó| に変わる。例— |škoá|θ okó|lj| |roátθ rócj|, |sóare sórj|, |ploáje plój|。この変化は規則的である。ゆえに, 形態音素群 -oa- に関連したものとして予言できる。我々は単に skoalθ-, roatθ-, soare-, ploaje- と書く。同様の変化 |wá~ó| は同じ条件のもとで, 先行するものに関連して |oá~ó| の変化を補足する。すなわち, |oá~ó| は子音の後のみ¹⁵, また |wá~ó| は語の始めのみに, |wárθ órj|, |wáje ój| のように起こる。|oá| を基本的なものとしてとれば, それが |wá| として現われるのは, |oá| が語の始めにくることができないためである。我々は, oarθ-, oaje- と書く。原注 16

特殊な複数形の u-base においてのみ, |ó| は -e- の前で規則的に |oá| に変化する。例— |avión avioáne|, |rθzboáj rθzboáje|。この変化は, base に関連して, 上に述べた変化を補足するものである。上と同じ形態音素群 -oa- (高母音の前では |ó| として, 他の場合には |oá| として現われる) の変化とみてよい。我々は, avioánu^v-, rθzboáju^v- と書く。

θ-base と u-base のうちのわずかのものでは, |í| は前母音の前では |i| に変わる。例— |sfíntθ sfínte|, |tínθr tinerj|, |kuvínt kuvinte|。この変化は規則的ではない。cf. |bθtrín bθtrínj|, |kucít kucíte|。だから, それは -i- とか -i- 以外の形態音素の変化とみるべきである。我々はそれを -I- という記号で表わし, sfIntθ^v-, tínθru- kuvÍntu^v- と書く。

原注 15 -θ- における |a~e| の変化は, 多音節の base の後方において, アクセントのない位置でも起こる。例— numθru^v-, |númθr númere|, tínθru- |tínθr tinerj|。(形態音素 I は以下で述べられる。) 唇音の後では, |θ| は変化しない。例— flókθrθ- |flákθrθ flókθrj|, strígθtu^v- |strígθt

strígðte|.

原注16 第4節で引用された、oasp[et]e-, oam[en]u- もそうである。

6 定冠詞形態と斜格形態 (Definite Morphs and Oblique Morphs)

定冠詞屈折は、8つの異なる音素の形をもつ。すべて、base の型によって、あるいは先行する複数形または次に続く斜格形態の有無によって異なる。斜格形態は、複数形態のあるところでは、-or-|or|, 他の場合には -j-|j| である。定冠詞の変化は次のごとくである。

(1) |a~j| 標準的な複数形をもつ ϑ -base と、多くの e-base において、斜格形態の有無に関連して。例— vak ϑ -|váka váčij|, 原注17 lún ϑ -|lúna lúnij|, str ϑ d ϑ -|stráda strózij|, treab[ur] ϑ -|tréaba trébij|, škoal ϑ -|škoála škólij|, here-|bérea bérjij|, kruče-|krúča krúčij|, bðje-|bája bðjij|.

(2) |a~e| 特殊な複数形をもつ ϑ -base と base 母音に先行する |i| をもつ e-base で斜格形態の之無に関連して。例— kas ϑ^v -|kása kásej|, kafeál ϑ^v -|kafeáwa kafelej|, 原注18 hirtíe-|hirtía hirtíej|。(1)と(2)の型において常に出てくる |a| は、語尾の弱母音 |aj| に対する制限を考慮に入れた上で、基本的なもののみなしてよい。我々は、base 母音 ϑ が、Ç や |i| の後、あるいは |i| の前での e のように、音韻論的にみて、消失したことに気づく。例— |bérea bérjij|。さらに、(1)と(2)で扱われた ϑ -base と e-base において、base の形態音素 -k- (-sk-), -g-, -t- (-st-), -d-, -s-, -z- は、アクセントのある母音形態音素 - ϑ -, -ea-, -oa-, -I- と同様に、第3節と第4節で述べられた base+複数の場合と、音韻的に同じ条件を伴った同じ変化を示す。

(3) |le~lu| 多くの e-base, 斜格形態の有無に関連して。例— frate-|frátele fráteluj|, munte-|múntele múnteluj|, nume v -|númele númeluj|.

(4) |l~lu| すべての u-base, 斜格形態の有無に関連して。例— anu-|ánu ánuluj|, deal[ur]u-|deálul deáluj|, m ϑ ru-|m ϑ 'ru| m ϑ 'ruluj|, satu v -|sátul sátuluj|, teatru v -|teátrul teátruluj|。(3)と(4)に常に出てくる |lu| は、base 母音の -u- と同様、基本的な形とみてよい。

(5) |le~l| ϑ -base と多くの e-base と、特殊な複数形で付加要素あるいは語尾にアクセントのない |iu| をもった u-base, すべて複数形で、斜格形態の有無に関連して。例— lún ϑ -|lúnile lúnilor|, kas ϑ^v -|kásele káselor|, bere-|bérole bérilor|, hirtíe-|hirtíjile hirtíjilor|, satu v -|sátele sátelor|, lukr[ur]u-|lúkurile lúkrurilor|, sédiu-|sédijile sédijilor|.

(6) |j~l| (3)で述べられた e-base と、(5)で述べられたもの以外の u-base, すべて複数形で、斜格形態の有無に関連して。例— frate-|fráciij|

frácilor|, munte—|múncij múncilor|, okiu—|ókjij ókjilor|, mθru—|mérjij mérilor|. (5)型では、基本形として|le|を、また(6)では|j|を、あるいは両方ともに|l|をとることができる。あらかじめ、基本形|le|と|j|を別々のものとして確認しておいて、我々は、|a, lu, le, j|の4つの基本的な一連の音素を考えることができる。|l|が2つの音素の両方の母音に先行しているという事実は、—L—という形態音素の存在を示す。それは、他の場合には、|θ|や|i|の前で消失するeのように、ここでは|a|の前で消失したものである。したがって我々は、形態音韻論上、その変化を—La—, —Lu—, —Le—, —Li—として定義づける。原注19

原注17 |vácij|は、それだけでは「牛乳」という意味である。

原注18 |kaféawa|の|w|については、原注19を見よ。

原注19 定冠詞形|kaféawa|, |stéawa|などにみられる|w|は、|a|の前で消失すると予想されるのに反して現われ、base|kaféa|と定冠詞形|kaféa+a|のあいだに違いを生じさせるbase子音—L—の特殊な現われとして分類できる。重母音^{訳者注10}に関する制限のために、|kaféaa|はありえない。特殊な形のziLθ^v—は、音韻論的には、|zia|という定冠詞形を持つと考えることができるが、しかし実際は、それは、|ziwa|という定冠詞形を持ち、base型以外の要素で形成される。

訳者注10 著者が重母音(geminate vowels)という場合、たとえば|éa óa|のような母音は1つの母音とみて、それと他の母音と重なる場合をさしている。第0節の音素の連続に関する制限のところで重母音といっているのも同じ意味である。

7. Base と複数形態の不連続 (Discontinuity of Base and Plural Morphs)

先に確認された定冠詞屈折の4つの形態音韻論上の型は、baseの型と、複数形か否かによって十分に決められる母音を含む。これらの母音は、互いに著しく異なっていない。それゆえ、形態的に関連のあるものとして考える必要はない。我々は、それゆえに、定冠詞屈折はただ形態音素—L—をもつだけであり、—e—や—i—は複数語尾の破片^{訳者注11}であるということを仮定する。以下の形態音韻論は、この不連続という仮定の上に立っている。定冠詞—L—があるとき、baseは次のような破片をもつ。

(1) θ—Baseは—a—をもち、それは語尾の|a|, 斜格屈折語尾の前の|i~e|として現われる。例—lunθ·L·θ(.j)=|lúna lúnij|, kasθ^v·L·a(.j)=|kása kásej|; steaLθ^v·L·a(.j)=|steáwa stélej|. これらは、標準的な破片をもつbaseであり、特別の形態音韻論上の注意は必要でない。訳者注20

(2) 大部分のe—baseは—a—をもち、(1)と同じように現われる。例—bere·L·a(.j)=|bérea bérjij|, kerte·L·a(.j)=|kártea kórcij|; hirtíe·L·a(.j)=|hirtía hirtíej|. これらもまた、標準的な破片をもつbaseである。

(3) e—baseの中には、—u—をもつものがある。それは、語尾では|e|, 斜格屈折語尾の前では|u|として現われる。例—frate·L·u(.j)=|frátele fráteluj|; nume^v·L·u(.j)=|númele númeluj|. これらは特殊な破片をもつbaseである。そしてbaseの中に破片を含めて書く—frate—u—, nume^v—u—のように。

(4) u-Base は u- をもち、それは語尾では消失し、斜格屈折語尾の前では $|\text{u}|$ として現われる。例— $\text{anu.L.u.(j)} = |\text{ánul 'anuluj}|$; $\text{satu}^{\vee}.\text{L.u.(j)} = |\text{sátul sátuluj}|$; $\text{lukr[ur]u.L.u.(j)} = |\text{lúkru lúkruľuj}|$.
これらは標準的な破片をもつ Base である。

複数形態は、 $|\text{i}|$ として現われる定冠詞屈折 $-\text{L-}$ の後に斜格屈折語尾の $-\text{or-}$ がくる時には、破片をもたない。例— $\text{kas}\theta.\text{e.L.or} = |\text{kásel or}|$, $\text{anu.i.L.or} = |\text{ánil or}|$. 現注 21 しかし、斜格屈折がない時には、破片は次のようになる。

① i-Plural は $|\text{e}|$ として現われる e- をもつ。標準的な破片をもつ θ -Base の後で。例— $\text{lun}\theta.\text{i.L.e} = |\text{lúnile}|$, $\text{baje.i.L.e} = |\text{bóľile}|$; $[\text{ur}]$ という付加要素のある Base の後ではすべて。例— $\text{treab[ur]}\theta.\text{i.L.e} = |\text{tréburile}|$, $\text{deal[ur]u.i.L.e} = |\text{deáľurile}|$. そして、アクセントのない $|\text{iu}|$ で終る u-Base の後で。例— $\text{sédiu.i.L.e} = |\text{sédijile}|$, $\text{servíčiu.i.L.e} = |\text{servíčijile}|$.

② i-Plural は $|\text{j}|$ として現われる i- をもつ。①以外の条件のもとで、すなわち特殊な破片を持つ e-Base あるいは、標準的な複数形の u-Base の後で。(語尾がアクセントのない $|\text{iu}|$ であるものを除く)。原注 22
例— $\text{fráte.i.L.i} = |\text{fráci j}|$, $\text{anu.i.L.i} = |\text{ánij}|$, $\text{kopíLu.i.L.i} = |\text{kopíľij}|$, $\text{fiu.i.L.i} = |\text{fijij}|$.

③ e-Plural は $|\text{e}|$ として現われる e- をもつ。例— $\text{kas}\theta.\text{e.L.e} = |\text{kásele}|$, $\text{nume.e.L.e} = |\text{númele}|$, $\text{satu.e.L.e} = |\text{sátele}|$.

原注 20 θ -Base の 1 つすなわち $\text{tat}\theta-$ は、標準的な破片 u- 、或いは (4) にみられるように、特殊な破片 u- をもつ ; $\text{tat}\theta.\text{L.a.(j)} = |\text{táta tácij}|$, $\text{tat}\theta.\text{L.u.(j)} = |\text{tát}\theta | \text{tát}\theta\text{ľuj}|$.

原注 21 もし破片があれば、斜格屈折 $-\text{or-}$ の前でそれらが消失することは考えられないであろう。というのは、 $|\text{eo}|$ も $|\text{io}|$ も起こるからである。

原注 22 $\text{tat}\theta-$ (あるいは $\text{tat}\theta\text{u-}$, 原注 20 と比べよ) の特殊な場合でもまた同様である : $|\text{táci j}|$.

訳者注 11 shard の訳である。

8 最終的な分類 (Final Classification)

第 1 節に引用された名詞は次のように分類される。

(1) θ -Bases.

標準型 : $\text{c}\theta\text{r}\theta-$, $\text{fl}\theta\text{k}\theta\text{r}\theta$, $\text{jearn}\theta-$, $\text{k}\theta\text{m}\theta\check{\text{s}}\theta-$, $\text{lun}\theta-$, $\text{oar}\theta-$,
 $\text{pisík}\theta-$, $\text{pušk}\theta-$, $\text{roat}\theta-$, $\text{sear}\theta-$, $\text{slug}\theta-$, $\check{\text{v}}\text{skoal}\theta-$,
 $\text{tat}\theta-$, $\text{vak}\theta-$, $\text{véar}\theta-$, $\text{vieác}\theta-$, $\text{z}\theta\text{péá}\theta-$.

特殊複数型 : $\check{\text{c}}\text{eap}\theta^{\vee}-$, $\text{f'éat}\theta^{\vee}-$, $\text{fijk}\theta^{\vee}-$, $\text{g}\check{\text{t}}\text{sk}\theta^{\vee}$, $\text{kaféaL}\theta^{\vee}-$,
 $\text{kas}\theta^{\vee}-$, $\text{m'éas}\theta^{\vee}-$, $\text{paráL}\theta^{\vee}-$, $\text{pižámáL}\theta^{\vee}-$, $\text{pjeatr}\theta^{\vee}-$,
 $\text{sfInt}\theta^{\vee}-$, $\text{steaL}\theta^{\vee}-$, $\text{ziL}\theta^{\vee}-$.

付加要素 : $\text{m}\theta\text{rf[ur]}\theta-$, $\text{m}\check{\text{t}}[\text{j}]\text{n}\theta-$, $\text{n[ur]or}\theta-$, $\text{s[ur]or}\theta-$,

treab[ur]θ-.

(2) e-bases.

標準型: bθje-, bere-, feméje-, hirtíe-, kθrte-, kruče-,
minge-, oaje-, ploaje-, žumθtáte-.

特殊破片型: frateu-, munteu-, soareu-.

特殊破片・特殊複数型: nume^vu-.

特殊複数・付加要素型: oasp[et]u-.

付加要素型: vrem[ur]e-.

(3) u-bases.

標準型: bθjeátu-, bθtrínu-, bradu-, buníku-, dentístu-,
englézu-, ewropéanu-, fiu-, kaLu-, kopíLu-,
mθru-, okju-, pasu-, plθmíNu-, pribéagu-, sédiu-,
servíčiu-, skiu-, studéntu-, sufrágiu-, tínθru-,
viteázu-.

特殊複数型: avióanu^v-, becu^v-, bi^vcu^v-, kucítu^v-, kuvíntu^v-,
muzéu^v-, numθru^v-, ou^v-, rθzboáju^v-, satu^v-,
strígθtu^v-, teatru^v-.
付加要素型: deal[ur]u-, kadó[ur]u-, kibrítt[ur]u-,
lukr[ur]u-, oam[en]u-, r+[ur]u-.

特殊複数・付加要素型: kap[et]u^v-.

9 形態に関するまとめ (Morphemic Summary)

base は形態論上、屈折語尾と区別される。base は、1つまたはそれ以上の形態音素から成る。すなわち、それが語根訳者注 12 であれば1つ、接頭辞あるいは接尾辞がつく場合は1つ以上。どちらの場合にも、base はBと印される。

複数の -i- と -e- は同じ形態素の異形態 (allomorph) であり、I と印される。

定冠詞の -L- は形態素Lの唯一の異形態である。

斜格屈折 -j- と -or- は(先行するBあるいはIによって異なるが) 同じ形態素の異形態であり、J と印される。

それゆえ、形態素の面からいえば、ルーマニア語の名詞は B ± I ± (L ± J) である。

訳者注 12 root の訳である。訳者注 5 を参照。

(大阪外国語大学)